特別展

諏訪信仰と御柱

SCM Suwa City Museum 諏訪市博物館

ごあいさつ

令和4年は、諏訪大社そして諏訪地域で最大の神事であり祭りである、式年造営御柱大祭の行われる年です。上社本宮の近傍にある諏訪市博物館でも、この大祭にあわせて諏訪信仰に関する特別展を開催することで、地域の方から遠来の方まで、広くそれらの歴史や内容について知っていただく機会をもうけたいと思います。さまざまな内容・側面をもつ諏訪信仰について、その一端でもお分かりいただけたら幸いです。

本特別展の開催にあたり、貴重な資料をご提供いただきました皆さまに対しまして、厚く御礼を申し上げます。

諏訪市博物館

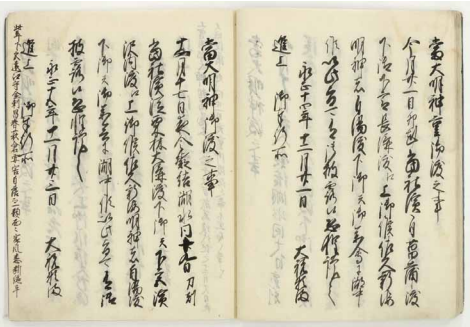
凡例

- 本書は、令和4年3月5日（土）から8月21日（日）の会期で開催する諏訪市博物館特別展「諏訪信仰と御柱」の、展示概要および資料の紹介パンフレットである。
- 本書で紹介する資料は特別展で展示する資料のうち主なものであり、すべてではない。また、開催期間中の展示替えにより展示していないものや展示場面が替わるものがある。
- 掲載資料のうち、所蔵先が明記されていないものは諏訪市博物館の所有・所蔵である。
- 本書の執筆・編集および資料の写真撮影（御柱絵巻を除く）は、当館学芸員の児玉利一が主に担当し、職員で校閲した。

テーマ1 自然に神をみる

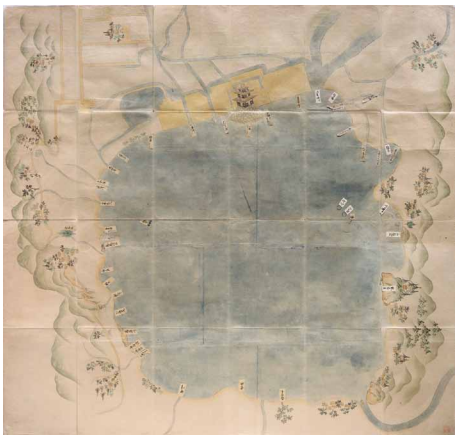
日本人は古来より「八百万の神」観をもち、さまざまな物や現象に神を見出し、崇拝してきた。諏訪地域においても、山や樹木、巨岩などにその存在を見てきた。『日本書紀』持統5年（691）には「須波神」が記載されるが、これは風の神とされる。風は雨や水の恵み（災いも）をもたらし、植物・生産物の恵みから農耕の神にもつながる。さらにそれは戦いの神にも発展する。

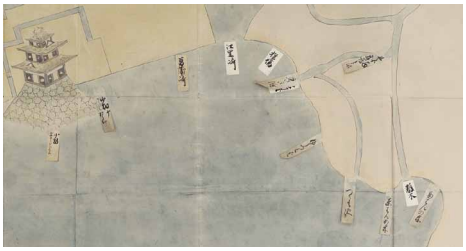
厳冬の諏訪湖に出現する御渡（御神渡）は、自然現象を神と捉えて、その出現の有無やその年の豊凶などを600年近く記録している、極めて稀な神事祭祀である。



當社神幸記　大祝諏方家資料

嘉吉3年（1443）から天和元年（1681）までの御渡注進状の控を書き写しまとめたもので、5冊からなる。御渡の結果を大祝から幕府奉行所へ注進した。内容は、大明神がいつどこの岸からどこの岸へ渡ったということが書かれてあり、年によっては時の社会情勢が追記されていることもある。「當社神幸記」の作成には寛文～天和年間に大祝をつとめた頼隆が関わっていると思われる。





諏訪湖岸古絵図　大祝諏方家資料

御渡を拝観するために使用されたと考えられる江戸時代前期の絵図。諏訪湖の南側の御渡発生地点を下御、諏訪湖北側の陸に上がる地点を上御というが、その下御・上御を確認するために使われたとみられる。慶長3年（1598）に築城された高島城が描かれている。絵図に書かれた地名には、現在も残るものとすでに失われているものがある。

テーマ2

狩猟の神

古代以降、肉食を禁じる仏教が全国的に広まったなか、諏訪社では狩りで得た獲物の肉が酉の祭（御頭祭）などの重要な神事に用いられることから肉食を正当化した。また、鎌倉幕府が狩猟を特定の神社のみに許した中に諏訪社があったので、肉食は武士たちや猟師などに受け入れられて広まった。「鹿食免」という狩猟免許状などは大量に発行され、神社や神官家にとって大きな収入源となった。

第２次調査 2a トレンチ 土壇葺石状遺構 藤森栄一資料

３回行われた発掘調査のうち、藤森栄一と諏訪考古学研究所などが関わったのは昭和 38 年の第２次調査、翌年の第３次調査である。当時の現場の様子が分かる。

旧御射山遺跡

御射山で行われる御射山祭は御狩神事であり、諏訪社の神事の中でも大祭である。上社御射山は富士見町、下社御射山は下諏訪町に所在するが、霧ヶ峰高原の八島ヶ原湿原外縁にある御射山は中世から江戸初期までの下社御射山であることから、旧御射山と呼ばれる。鎌倉時代には朝廷勅使や鎌倉幕府の有力御家人、信濃一円や甲斐の武士たちが旧御射山に集まり、弓技や相撲などを奉納したとされる。遺跡は昭和30年代に金井典美ら早稲田大学により発掘調査が3回実施されている。東京オリンピック開催の頃で古代の競技場などと注目されたが、神事・祭儀的な性格が強いことが分かった。

青磁　旧御射山遺跡 金井典美資料等

中国の龍泉窯または同窯系のものとみられ、13 世紀から 14 世紀のものを主体とする。かわらけと違い、輸入された高級嗜好品で、それを惜しげもなく廃棄したのは、祭儀への奉斎であることと、比較的潤沢に所有できた階層の人物たちの来訪を思わせる。

ロクロかわらけ　旧御射山遺跡 金井典美資料等

ロクロかわらけは諏訪社関連の遺跡からも多く出土する。手づくねかわらけとの使い分けや使用者の違いを反映するのかはまだ分かっていない。器形や大きさはさまざまあるが、数百年の時間幅があるものが混在していることに注意が必要である。

手づくねかわらけ　旧御射山遺跡 金井典美資料等

中世から近世にかけてもっとも多く生産・消費された焼き物。その理由に儀式饗宴などの場で１度使用したものは廃棄するとされる。手づくねかわらけは主に京都など西日本に分布の中心があった。ところが旧御射山遺跡では相当量の手づくねかわらけが出土している。

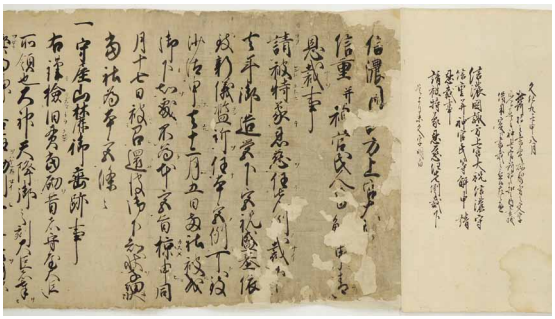
テーマ3

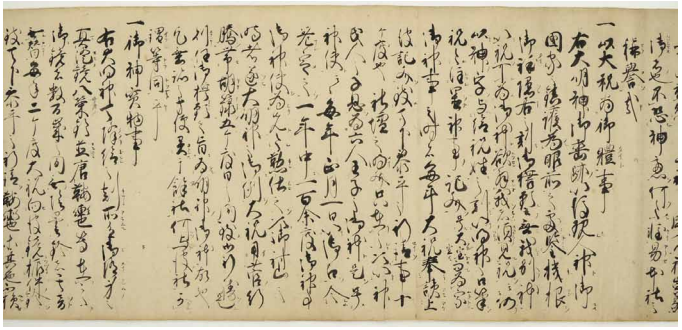
現人神 大祝

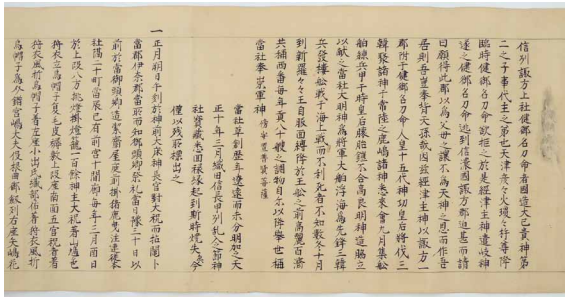
大祝とは、諏訪明神のよりしろ・現人神として諏訪社の頂点に位置した役職で、上社大祝は古代から近世末に至るまで世襲され「諏方氏」を名乗った。中世までは諏訪の領主として政治権力も握っていた。江戸時代には高島藩主の諏訪家と大祝の諏方家ができて政教分離がなされ、明治維新を経て宗教政策の転換に伴い大祝職も廃止された。生き神を祀る信仰が存在し続けた神社は全国的にみても珍しい。

大祝信重解状　大祝諏方家資料

鎌倉時代の宝治３年(1249)、上社大祝の諏方信重から幕府に提出された、上社と下社どちらが本宮であるかの争いで、上社の言い分を記した訴状の写本。現人神である大祝像を上社の特徴として掲げている。

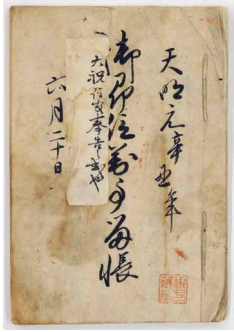


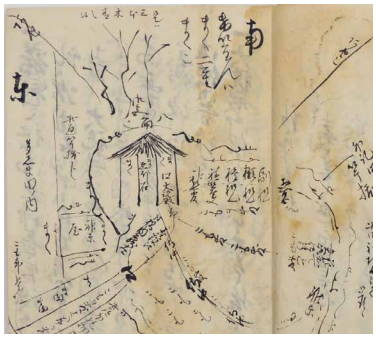




社例記　大祝諏方家資料

延宝7年（1679）、大祝頼隆より寺社奉行松平山城守へ提出された書類の控。諏訪社の由緒、主な祭礼の次第、建造物、宝物、来歴、神官、社僧などを列記する。





御即位万事留帳　大祝諏方家資料

大祝となるには「即位式」という儀式を行う必要があり、男児は神長官の手ほどきを受けて前宮近くにある鶏冠社で儀式を行った。資料は天明元年（1781）に諏方頼本が大祝に即位した時の各種記録を記したもので、八角形の建物の中で秘事を授かった。

八角級笠（はっかくしながさ）　大祝諏方家資料

八角形の笠を二段に重ね、丸めた帯状の飾りをつけた独特な笠。『信濃奇勝録』（天保5年・1834）には御柱祭と御射山祭の時に大祝のみが身につけるものとして挙げられている。

毛沓（けぐつ）　大祝諏方家資料

底は皮製で猪の目形の孔があく。足の甲部分に黒色の「毛」が植え込まれているのが最大の特徴であり非常に特異なものである。祭儀などの際に用いる特別な履物と推測される。

鐙（あぶみ）　大祝諏方家資料

鉄製で外面に象嵌（ぞうがん）で文様を施し、内面は朱漆塗り。このほか鞍（くら）や泥障（あおり）もあるが、セットであったかは不明である。

扇面蒔絵四段重箱　大祝諏方家資料

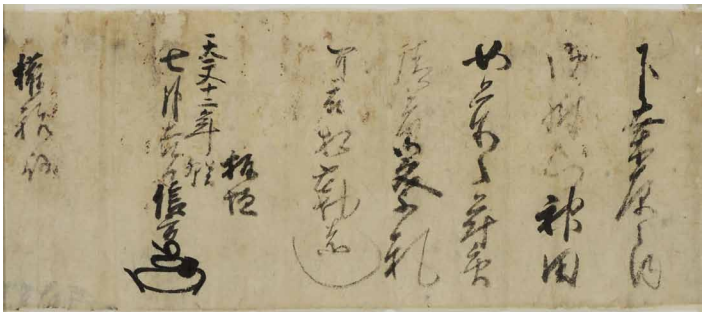
定型化した丸に穀（かじ）（梶）の葉紋の蒔絵が施される。豪華な暮らしぶりをうかがわせる。

盥（たらい）と湯桶（ゆとう）　大祝諏方家資料

盥と湯桶は一組で用いられ、湯桶に湯水を入れ、盥に入れて洗面や化粧の際に使用するためのもの。蒔絵の穀（かじ）（梶）の葉紋は定型化する以前の写実的で古い形である。

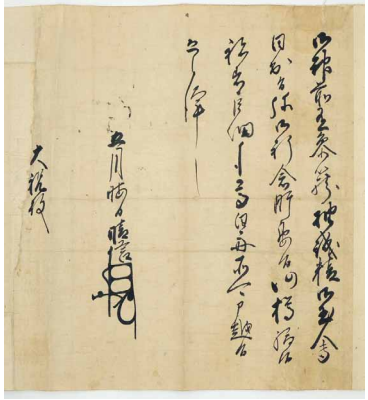
テーマ4 武将たちの信仰

戦いの神として武運長久を願う諏訪社は、戦と領地の奪い合いを繰り返す戦国武将たちからの崇敬を集めた。とくに隣国甲斐の武田家は領地である諏訪地域を治めるとともに、諏訪の人々が心を寄せる諏訪社を守ることで、領地の安定した支配を実現しようとした。大祝など神官家も有力武将と良好な関係を築くことで自身の安全を担保できたという側面もあり、互いに結びつくことになった。



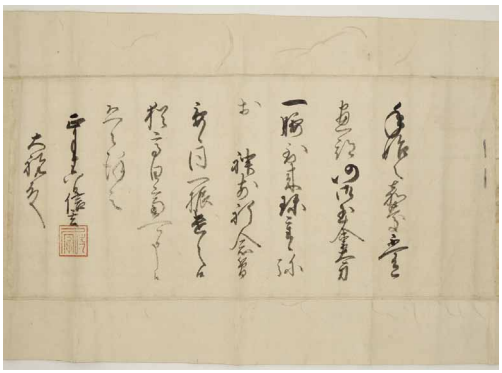
権祝（ごんほうり）宛て板垣信方安堵状　権祝矢島家資料 寄託

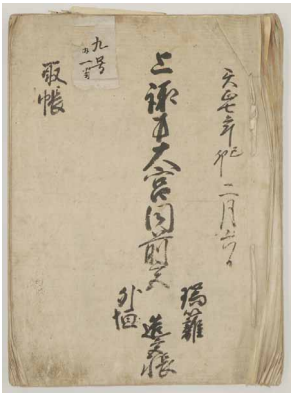
武田氏は前年に諏訪頼重を滅ぼし諏訪郡を支配したが、武田氏家臣で諏訪郡代を務めた板垣信方が、上社権祝矢島氏に対し、下桑原にある御射山の神田について、従来どおりに年貢を受け取り、祭礼を勤めるよう命じた文書。



大祝宛て武田信玄書状　大祝諏方家資料

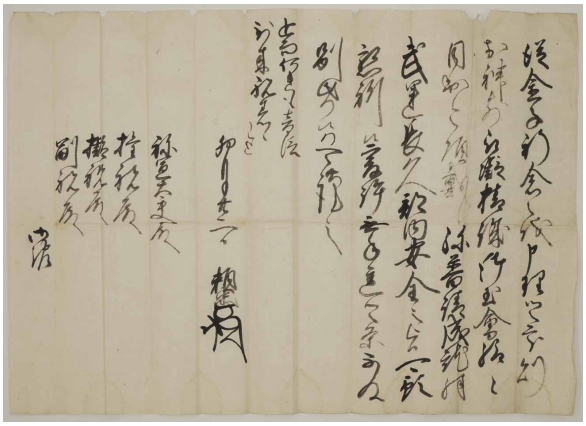
武田信玄（晴信）が大祝・諏訪頼忠に宛てた書状で、祈祷と御玉会や太刀等が贈られたことに対する礼状。「武運長久を祈ることが最も重要なこと」との記載があるものもあり、軍神の加護を期待していることが読み取れる。





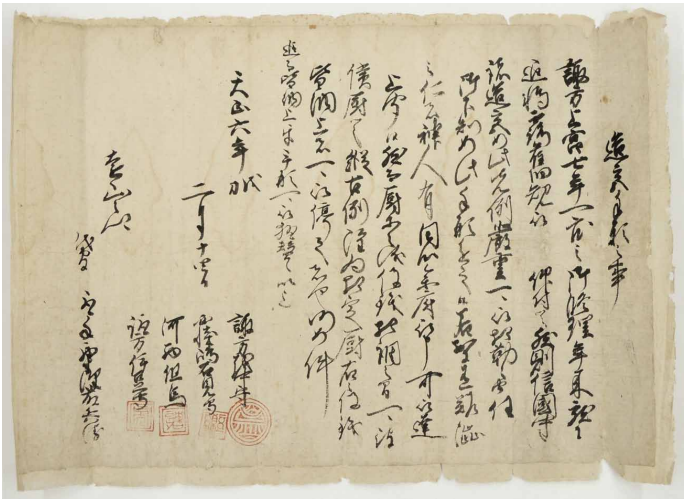
上諏方大宮同前宮 瑞籬（みずがき）外垣造宮帳　大祝諏方家資料

天正６年（1578）から7年に武田家が指示して行われた諏訪社の造営に関する費用やその負担する郷村などを記したもの。武田勝頼が作成を命じた。この頃は社殿造営の一環で御柱の建て替えが行われていた。資料は天正７年２月６日付けで郷村からの集金額と全体の収支額・残額を記した決算書である。



神官四家宛て諏訪頼忠書状　権祝矢島家資料 寄託

諏訪頼忠から諏訪上社の神官四家（祢宜（ねぎ）大夫（だゆう）・権祝（ごんほうり）・擬祝（ぎほうり）・副祝（そえのほうり））に出された書状。祈祷を依頼したこと、普請成就を祈るべきこと、多忙なことが書かれている。金子城築城中のこととみられる。



造宮手形之事　大祝諏方家資料

天正６年（1578）寅年の諏訪社の社殿造宮にあたり、造宮帳に基いて費用を集める郷村や神社の担当者にあてて造宮を厳重に務めさせるために発行した手形。この頃の諏訪社の造営は信濃国一国をあげて負担する仕組みで、費用を集める担当者宛てに数多くの造宮手形が発行された。勝頼が強力に造営を推し進めたことをうかがわせる。この手形の宛先は下伊那の遠山郷。

テーマ5

御師たちの活躍

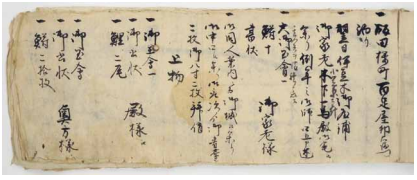
御師（おし）とは神社と檀那場（だんなば）（檀家・得意先）との連絡係に当たるもので、近世の諏訪社は大祝はじめ五官の家々に属した御師があった。御師は各家の檀那場を回って、御札や御守りとともに鹿・猪除けの御札や鹿食免の御札、鹿食箸などを配り、初穂料（はつほりょう）などの金穀を集めた。五官にはそれぞれの檀那場があって他家の御師がそこへ入っていくことはできなかったようである。

回村の際は丁寧に土産物を持って行き、各村の名主宅をたずねて依頼し、個別に寄付をしてもらったり、地元の役人に集金をしてもらうこともあった。諏訪社の御師に関する資料は少なく、また研究も途上で詳細は分からないことが多い。

版木（右から 諏方宮国土罪昆虫猪鹿災除祓・御玉会 諏方上宮五官祢宜大夫・諏方宮五行相生御祈禱祓） 御師平林家資料

中洲中金子の平林家は祢宜大夫と権祝の2つの神官家の御師を務めていた。檀那場は主に中信・南信であったとみられる。「御玉会」とは諏訪社に固有のもので、現在の御札に類するものだが、諏訪大明神の姿の写しであり神秘とされたものという。版木は包紙に押されたものとされ、その中身は分かっていないが、そのひとつには定められた紙を折ったり切ったりしたもの「御玉井紙」の可能性がある。ほか、動物除けなどのさまざまな御札や御守りを発行していた。

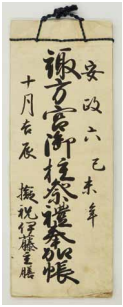
和田町組松本御檀家名面初穂帳



飯田御檀家名面御初穂帳

右から 会津諸事日記帳・和田町組松本御檀家名面初穂帳・飯田御檀家名面御初穂帳 御師平林家資料

御師の重要な活動に、各地を回って諏訪社の御札など神物を配り初穂料を集めることにあった。これはまた諏訪信仰を広める布教活動であり諏訪詣でのアピールに巡ることでもあったと思われる。天保6年（1835）の「和田町組松本御檀家名面初穂帳」には、初穂料の額によって渡す御札や土産物の種類や数を決めていたことが記される。また、権祝御師として福島県会津地方へも行ったことが知られる。



諏方宮御柱祭礼奉加帳　擬祝伊藤家資料 寄託

擬祝の御師資料は擬祝伊藤家に残された。安政６年（1859）「諏方宮御柱祭礼奉加帳」では、次の申年（万延元年）の御柱祭のため、現在の長野市を中心とした北信の村々236ヶ村から、一村あたり鳥目72文や、青銅10疋から50疋というように、奉加帳をまわして奉賛金を集めている。この資料からは江戸末期においてもまだ諏訪社は信濃一円にその信仰的基盤を持っていたことがわかる。

右から 御初穂帳・毎年配札御初穂帳（慶應２年・慶應３年）擬祝伊藤家資料 寄託

天保14年（1843）の初穂帳は、現在の須坂市・小布施町・中野市・長野市の村々から奉納された御初穂が記載され、名主たちが署名押印している。擬祝家の活動範囲は北信を中心としていたようである。慶応２年（1866）12月の初穂帳では上水内郡・下水内郡・埴科郡・更科郡・上高井郡・下高井郡の口数245で金にして九両を集めている。

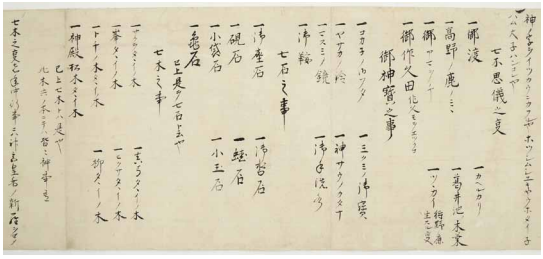
御玉会など各種の版木　大祝諏方家資料

大祝諏方家にはさまざまな御札・御守りの版木が残されている。「御玉會 諏方大祝」は封紙に押印したものとみられ、その中身については分かっていない。ほかに「猪鹿災除祓」・「祈年穀八十玉籤」・「蟇目守」などの農耕に関わる御札や、「安全守」・「御守」など現在もみられるようなものもある。御師など大祝諏方家内の家政機関が印刷など制作と各地の檀那場や講などへの販売を担っていたと推測される。

テーマ6

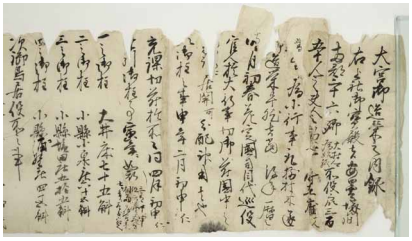
御柱祭

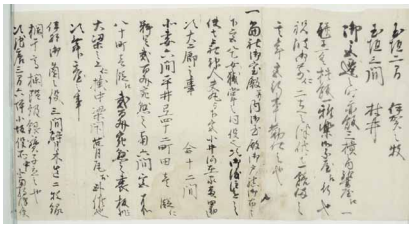
御柱祭（式年造営御柱大祭）は7年目ごとに1度、寅年と申年に行われる祭であり神事である。諏訪大社四社にそれぞれ4本の御柱を建てることと、宝殿の建て替えを主な内容とし、現在は諏訪地域6市町村の氏子により行われている。その歴史と変化などについて資料を基にみてみたい。



諏方上社物忌令（ものいみれい）　上社大工棟梁原家資料 寄託

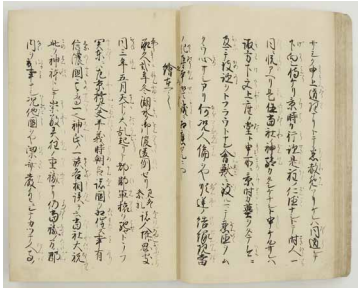
「諏方上社物忌令」は嘉禎４年（1238）作成で原本は諏訪大社が所蔵しており、本資料は写しではあるが古く原本で破損する箇所も分かる。鎌倉時代の諏訪の信仰の様子がうかがえる資料。現在でも聞くことがある御柱年に避けるべき人々の行動や、七不思議・七石七木は本資料に記載がある。





大宮御造営之内録　権祝矢島家資料

原本は諏訪大社所蔵の「大宮御造営之目録」で、諏訪社の式年造営について書かれた現存最古の記録である。本資料はその写しである。原本は鎌倉時代の嘉暦４年（1329）３月に書かれたもので、鎌倉幕府の執権 北条高時により出された。建て替えを行う建物ひとつひとつについて担当とされた郷村の名前が細かく記される。ここに書かれる御柱は現在と同じように「一之御柱」・「二之御柱」と呼ばれている。



諏訪大明神画詞（えことば）　大祝諏方家資料

室町時代の延文元年（1356）に諏訪（小坂）円忠によって編纂された諏訪社の縁起書。本来は絵巻物だったが、絵画が失われて詞書のみが残る。同書には平安時代の桓武天皇の時代にはすでに御柱祭（社殿造営・建て替え）が行われていることが記されている。

御柱曳行の場面

権祝矢嶋氏の行列の場面

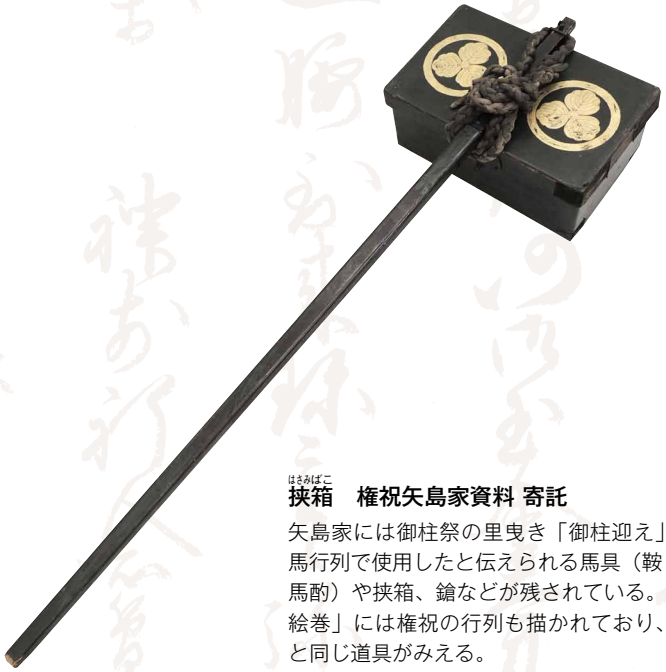
大祝諏方氏の行列の場面

御柱絵巻　北澤晃氏所蔵

この絵巻は明治 17 年（1884）の御柱年に上諏訪上町の商人北澤栗園が筆写したもの。原本は寛政 11 年（1799）に高島藩の絵師山中方英により描かれたもので上・下巻からなる。上社の曳行と騎馬行列を描いている。御柱を曳く時のメドデコはなく、柱後方の追い掛け綱で御柱を曳く様子は、現在の曳行との違いである。

斧　大祝諏方家資料

朱塗り。銘「于岩明治十七次甲申年 十月吉日川上信近作」。川上信近は諏訪の刀工。大祝家には信近作刀で高島神社奉納の銘が入る短刀もある。朱塗りの斧は御柱祭に関連するものであったかもしれない。



挟箱（はさみばこ）　権祝矢島家資料 寄託

矢島家には御柱祭の里曳き「御柱迎え」の騎馬行列で使用したと伝えられる馬具（鞍・鐙・馬酌）や挟箱、鎗などが残されている。「御柱絵巻」には権祝の行列も描かれており、実物と同じ道具がみえる。

諏訪上宮古絵図　権祝矢島家資料 寄託

本図は上社古図とも称され、神宮寺区所有の諏訪大社上社古図（市有形文化財）の模写とされる絵図。江戸時代初期の上社周辺が描かれた最古級の絵図。守屋山麓を上方に置き、中央には神宮寺の堂塔、右側に本宮の境内が詳細に描かれる。大祝家や五官家の場所も分かるなど、非常に多くの情報を知ることができる。本宮・前宮それぞれに４本の御柱が建っている。

主な引用・参考文献

金井典美1968『御射山』／諏訪市1988『諏訪市史 中巻』／諏訪市1995『諏訪市史 上巻』／諏訪市・諏訪市教育委員会2007『戦国時代の諏訪』／諏訪市教育委員会生涯学習課文化財係『諏訪上社大祝諏方家住宅』／諏訪市博物館1992『開館二周年記念・第十回企画展示 諏訪市博物館所蔵品展 展示図録－'92』／諏訪市博物館2000『開館10周年記念第28回企画展 大祝－諏訪の現人神－』／諏訪市博物館2016『教えて!! 諏訪の御柱』／諏訪市博物館2017『諏訪市博物館所蔵 織豊期古文書集』／茅野市神長官守矢史料館2018『御渡－史料と科学からみる諏訪の不思議－』／中洲公民館1985『中洲村史』／長野県立歴史館1998『1998年度秋季企画展 諏訪信仰の祭りと文化』／原直正2021「御玉会浄土幻想」『スワニミズム』第5号 スワニミズム／山梨県立博物館2016『開館10周年記念特別展 武田二十四将－信玄を支えた家臣たちの姿－』

特別展　諏訪信仰と御柱

発行日　令和４年（2022）３月５日

発　行　〒392-0015 長野県諏訪市中洲 171-2

諏訪市博物館

電話　0266-52-7080

印　刷　株式会社中央企画

本書の無断複製・転載を禁じます